**★★**

**ロシア革命との個人的出会い　飛び石伝いの回想**

**武藤一羊**

**「ＸにとってＹとは何か」、という式の設問をぼくは苦手とするが、問われた以上しかたない。ロシア革命がどのようにぼくの人生に出現したか、初めて振り返ってみた。一九三一年九月、関東軍が「満州事変」を引き起こす四日前に生まれ、小学校高学年まで「満州国」で育ったぼくにとって存在したのは「ロシア革命」ではなく「ソ連」というものだった。ソ連は「満州国」政府の日系官吏だった父親の世界が対決している何か巨大な異世界だった。父親の書棚には「国体の本義」などとならんで、「ソ連五か年計画」を易しく解説するシベリア開発の本（多分著者はイリンというジャーナリスト）など何冊かの「ソ連もの」が置かれていた。（こうした書物は一般には禁書だったが、ソ連は関東軍＝満州国にとって、仮想敵国であり、開発のライバルであり、同時にモデルでもあったので、五か年計画モノは、内輪向けに翻訳、印刷されていたのである）。またぼくの一家は革命を逃れてきた「白系露人」一家と付き合いがあり、母親は気立てのいい年上のロシア女性にロシア料理を伝授してもらったりしていた。（本当はそこでロシア革命に裏口から接触していたのだが、気付くはずもなかった）。**

**一九三九年、独ソ不可侵条約の年、父親の役所の運動会に連れていかれた。ハイライトは華やかなページェントで、広い運動場に巨大な人型の張りぼて担ぎ出された。一人は眉が濃く髭をピンと立てた人物。もう一人は白人のハリボテ。そこにもう一つ貧相な日本人のハリボテが登場。会場がどっと沸いた。スターリンとリッベントロップ、松岡洋介だったにちがいない。あれがスターリン、と教えられた。なぜかスターリンの名前だけが頭に焼き付いた。そこにはソ連とスターリンはあったが「ロシア革命」の姿はなかった。**

**妙な話だが、ぼくが間接的とはいえ、ロシア革命と出会うのは中国革命経由でではなかったかと思う。一九四九年ぼくは新制高校三年生だった。新聞に国民党軍との内戦で共産軍がどこまで進出したかの記事が日ごとに大きくなるスペースで報じられていた。毛沢東という名前にもそこで出会ったような気がする。その年四月、新学期の最初の歴史の授業で、生徒の尊敬を集めていた東洋史学者のＨ先生は、時間いっぱい使って、中国について熱を込めて語った。中国で起こりつつあることは、近代日本が侵略によってつくってきたアジアの歴史を根本から覆す革命である、それはこれまでの日本の在り方を底から変えるだろう、そうＨ先生は言った。まったく新しい話し、見方で、ぼくはぐいと引き込まれた。その年の夏休み、Ｈ先生の紹介状を持って、炎天下、国会図書館へ通った。赤坂離宮、いまの迎賓館、が当時の国会図書館であった。その特別閲覧室というのに入れてもらうと、ガラス箱のなかに、延安で出版されたパンフレットやビラが並んでいた。その脇の木椅子で仮翻訳された毛沢東の論文集を読むことができた。「持久戦論」、「新民主主義論」を読んだ。雷が落ちたような衝撃を受けた。日本帝国の侵略をどのように迎え撃ち、反撃し、勝利するか、それを通じて、中国を半植民地状態から解放し、どのような新中国を建設するかという戦略がそこにはっきり記されていた。そして現実はその通りに進んできたではないか。それらは自信のみなぎる、思想的な、力のある、楽天的な文章であった。論文でなく、予言の書でもなく、方針書であった。そして中国では〈人民〉がそこに記されていることを実現しつつあった。新聞紙面の奥から吐き出されてくる断片的中国内戦報道は、つなぎ合わせるとジグソーパズルのように来るべきものの輪郭を浮かび上がらせた。**

**この革命と中華人民共和国の成立は、ぼくにとって解放的な出来事だった。背中に縛り付けられていた重荷が下ろされる感覚だった。「満州国」でぼくは、子供なりに何かを背負って暮らしていたのだと思う。あとから思うと、異民族を支配・抑圧する関係の中で〈日本帝国臣民＝満州国国民〉として暮らすことの重さ、圧力が日常的に子供の上にもかかっていたのであろう。中国革命の勝利はぼくに、この圧力が取り去られる感覚をもたらした。もはや他民族を抑え込み、日本人という立場・体面を維持するため突っ張っている必要はなくなった。どこかそうで感じられ、それが解放感となったのであろう。ともかく中国革命の勝利はぼくにとって魂レベルの出来事と言っていい経験であった。**

**ぼくの一家は一九四三年（昭和一八年）の暮れに東京に移った。敗戦を満州で迎えていない。引揚者の味わった過酷な経験を潜っていない。だから上述のようなぼくの「ソ連との出会い」、等々は観念的で、甘い。特権的と言ってもいい感想だろう。中国革命についてのぼくの右記の感覚は、日本国への違和感と対になって生じたものと言える。内地の土を踏み、内地の空気を吸ったとき、ぼくはやり場のない怒りを感じたことを覚えている。日本とはなんと生ぬるく、たるんだ国か！と衝撃を受けたのである。誰も彼もが日本語を話しているではないか、真冬なのに木々の緑がみえるではないか。許せない！満州で突っ張ってきたのは、この和気あいあいの日本国のためだったか！許しがたい！関東軍の国で育てられた一二歳少年の右翼的反応であった。だが確かに、日本国というものへのぼくの違和感はこの辺で発生し、今に続いている。**

**ともあれ、中国という巨大な存在の、予想だにしなかった底からのうねりのような変化を感じ取ることで、ぼくは新中国の成立を通じて、革命というものに、その根源的な解放力とでも言うべきものに、自分なりの通路で触れたのだと思う。やがて、ぼくも、中国共産党はロシア革命を成功させたソ連共産党とつながり、世界共産主義運動の一部であることを学んだから、中国革命の衝撃からロシア革命に導かれていくのは理の当然だった。しかしそれはあまり解放的プロセスではなかった。**

**ぼくは一九五〇年四月に大学に入ったが、六月には朝鮮戦争が始まった。米軍占領下でももっとも厳しい時期で、米軍警察（ＭＰ）がデモ参加者を直接逮捕し、軍事裁判にかけ、長期重労働刑の判決を下すことも起こっていた。学生運動は、学園レッドパージに反対して激しい闘争を繰り広げた。それに参加するなかで、ぼくは共産党に入った。つまりロシア革命に歴史的につながる組織に加わったことになる。弾圧下の半非合法共産党は、アメリカ帝国主義と日本反動勢力にたいして武装闘争を展開するという方針を出していたが、これは日本の革命戦略としては的外れの愚かな試みで、本気の武装闘争などは成立しなかった。だが、朝鮮人の同志たち（当時日本共産党は朝鮮の共産主義者を含む組織だった）にとって日本での闘争は朝鮮半島における米侵略軍に対する民族統一戦争の後方を担う戦いという意味を持っていたのであろう。彼ら、彼女らの本気の戦闘力にわれわれは圧倒された。方針の誤りは別として、これは得難い国境を越えた闘争の経験だった。**

**先を急ごう。ここではロシア革命は、ソ連とスターリンとして存在した。たしかにその頃までには、ぼくもマルクス主義の文献も少しは読み、革命期のレーニンの論文や演説にも親しんでいた。だが、ロシア革命という概念はと言えば、それはモスクワの国立政治出版社の出した大判の書物、スターリンその人の手になるとされた「全ソビエト社会主義共和国同盟共産党（ボ）史（小教程）」という「経典」の説につきた。（「ボ」というのは「ボリシェヴィキ」のこと）この書物の荘重で断定的な文体は、正教のを連想させるものだった。そういえばスターリンはもともと神学生だった。解放の感覚を呼び覚ますほずの「革命」というものと、「ソ連＋スターリン」はほとんど通底するところがなかった。**

**一九五三年三月、このスターリンが死んだことは、世界的大事件だった。株は暴落し、不況が襲った。ぼくの大学では、史学科の党員たち一〇人ほどが西洋史の研究室に集まって、多少の不安と何か荷物を下ろした感覚で、雑談した。問わず語りに新しい時代の予感が共有されていたように思う。一人の院生が、ギターを爪弾きながら「スターリン・カンタータ」を歌った。なぜか冒頭の歌詞を覚えている。**

**おおスターリン、聡明な**

**偉大な、愛する**

**われらは、こぞりて、讃えん**

**メロディは今でも耳に付いている。**

**革命としてのロシア革命に初めて出会うのはその後である。舞台は回り、新時代が始まる。一九五二年、講和・安保条約、それによる沖縄の米軍事植民地の永久化合意、などを経て占領は終り、共産党は地上に出、議会では自民党と社会党が対抗するいわゆる五五年体制が始まる。戦後日本資本主義の勃興期である。妙に聞こえるかもしれないが、ぼくはその中で、初めてロシア革命に、つまり革命としてのロシア革命に出会うのである。ソ連国家としてでも、スターリンとしてでもない、しかし同時にソ連国家でもありスターリンでもあったロシア革命に、である。この出会いは、中国革命の場合とも性質を異にしていて、強いて言えばより知的・理論的な比重が高かった。一九五六年のソ連共産党二〇回大会でのスターリン批判が壁を崩した。広い歴史空間が私たちの認識の中に出現し、そのなかで、ロシア革命を認識し、位置づけ、追体験的に想像することができるようになった。一九五五―六〇年は、日本の左翼にとって知的発酵の時期だったと思う。国際的にもそうだったに違いないが、三〇年代半ばから自由な思考が抑え込まれていた日本では余計はっきりそれが感じられたのだと思う。共産党中央の統制力から解放された旺盛な知的吸収と思考活動が始まった。トロツキー、グラムシ、ローザの選集が矢継ぎ早に刊行され、レーニン選集とマルクス・エンゲルス全集の刊行も始まった。若い共産主義者はやる気を出し、組織を越えた「横議横行」を始め、新しい雑誌を出し、新しい書物を紹介し合い、古い教条を批判し、自分たちの力で、社会を変えるための方法と実践を発見しようとした、と言えるだろう。ぼくにとって、ロシア革命は、その空間の中で初めて、生きた、把握可能なものとして立ち現れた。それは中国革命とは違った出会い方であったが、革命との出会いであったことは間違いない。そしてそれはロシア革命にとどまらず、二〇世紀というものへのぼくの参加でもあった。**

**その二〇世紀は終わり、ロシア革命から一〇〇年が経った。だが一〇〇周年を記念する動きは内外共に弱いように見える。**

**ぼくはマルクス主義思想に依拠する共産主義運動が、二〇世紀を形成する一個の巨大な能動的な主体であったし、それを生み出したのが一九一七年のロシア十月革命であったことは好悪を越えて認められるべきであると思う。都合が悪いからと、あったものをなかったとして二〇世紀の歴史を語ることはできない。**

**ロシア革命を契機として、帝国主義、・植民地主義・資本主義などが、世界的に夥しい民衆の変革的な実践の対象として把握され、それが膨大な民衆の主体化を促し、帝国主義と資本主義にたいする現状変革の運動を解き放ったことは疑うが余地がない。この革命はソ連邦という国家体制として確立され、第二次大戦を通じて共産主義陣営というものを形成し、米国との冷戦の当事者となって国際政治を規定する力となった。だが、その体制は、「収容所群島」の上に成り立つ帝国となり、ついにそこからの自浄力を持たなかった。そして世紀の終わりを待たず一挙的に崩壊し、その余波の中で資本主義は全一的なグローバル・システムとして復権した。世界資本主義システムへのこの第一波の攻勢は、成功し、成功の結果、敗北した。**

**なぜか。とくに敗北の内的原因は何か。民衆の自己解放の力を解き放った革命が、なぜおぞましい抑圧的な体制に転化したか、夥しい人間に理不尽な死と屈辱をもたらしたのか。復権した資本主義が人類社会を自滅的なコースに引きずり込んでいる今日、資本主義を終わらせるグローバルな運動の第二波が始まっているとぼくは考えているが、この第二波が成功するためにはこの「なぜ」に答え始めることが絶対に必要だ。一〇〇周年はその出発点としての意味を担っているとぼくは思う。**